『近代化による民俗芸能の積極的変容と、そこに生じる新たなプラットフォームの可能性』

武田 力（たけだ りき）

１. 活動概要

2020年２月２日～２月29日までをフィリピン、３月１日～３月24日まではタイに滞在してリサーチを展開した。フィリピンには以前から縁がある。2015年にKarnabalというフィリピンの国際演劇祭[1]に招聘され、３年を掛けて作品を制作。2017年にマニラ首都圏内のトンド地域などでその作品を発表した[2]。そのため、フィリピンではある程度の土地勘と頼れる友人がいる中でのリサーチとなった。対照的にタイにはほぼ初めての滞在となり、またコロナウイルスによる影響も日が経つにつれ徐々に強く受けるようになった。

今回のリサーチは以下を目的としておこなわれた。

・民俗芸能とアートとがどのように接続／融合し、それぞれの在り方に変化が生じてきているのかを知ること。
・急速に変容するアジア社会に対応しながら民俗芸能とアートとが接続／融合することで生じる新たなプラットフォームの萌芽を探すこと。

近代化以降、社会の価値観は多様化し、それとともに人々の分断も顕在化してきた。現代社会は多様化を促すとともに、SNSをはじめとして自身の社会の外とは出会わない仕組みもまた構築している。その一方で、自分たちのコミュニティの内側に終始することで、育まれてきた文化があることもまた否定できない。民俗芸能も集落の閉鎖性の上に築かれてきた面は少なからずあり、その閉鎖性ゆえに現代まで残ってきた文化もある。課題は技術革新による社会変容や、それに起因して生じる分断そのものではなく、この現代社会において、本当にわたしたち人間が必要とする文化とは何か、次代に継ぐべき人間の根源性とは何かを広く思索することである。もしその必要性も感じられないのなら、すでに人間としての尊厳すら資本主義経済に奪われてしまったのかもしれない。ともあれ、そうした略奪を免れた文化を拾い集めていくことで、また、そうした古くからの文化と並走し共存するアートを見て回ることで、人間にとって大事な文化とはなにかを見つめ、できることならばその志向性を取り戻し、現代という時代に改めて表象できればと考えている。これは、その足がかりを探すためのリサーチである。

---

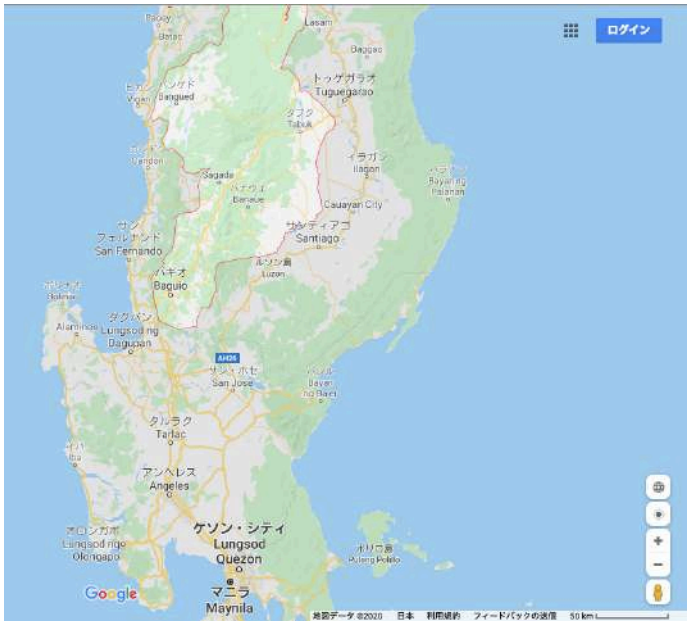
[1] Karnabal webサイト：https://www.facebook.com/karnabalfestival/

[2] CNNフィリピンによる作品動画：http://cnnphilippines.com/life/culture/arts/2017/05/25/takoyaki-karnabal-festival.html

２.【活動記録１】フィリピン・コーディリエラ地方に継がれてきた生活文化

フィリピンの首都マニラから高速バス[3]で４時間ほど北上すると現れる天空都市バギオ。1898年、米西戦争の勝利によってスペインからフィリピンを譲渡されたアメリカであったが、マニラの暑さに辟易し、避暑地として開発されたのがこのバギオであった。しかし、それ以前からバギオを陸の玄関口とするコーディリエラ地方には独自の文化が開かれていた。

バギオを拠点とし、コーディリエラ地方の環境保全と先住民族の暮らしの向上を目的として2001年に開設されたNGO法人コーディリエラ・グリーン・ネットワーク[4]（以下、CGNと表記）の創立メンバーである反町眞理子さんがフィリピンでのリサーチを受け入れてくれた。反町さんは2017年までCGNのディレクターを務め、TALA[5]というバギオのゲストハウスの経営も近年まで手掛けていた。また、貨幣経済の浸透とともに住民が都市へ流失するなど、これまでの生活文化の継承が難しくなったコーディリエラ地方の村々に、コーヒーの栽培を提案し、各村で収穫されたコーヒー豆のフェアトレードなどをおこなっている。以下は反町氏よりそのコーディリエラ地方における生活文化と、彼らの置かれた現状を聞き取った内容である。



コーディリエラ地方とバギオ、また首都マニラとの位置関係。（Googleマップより引用）

＊

フィリピン政府より自治権が認められているコーディリエラ地方の村々間では水の利権や土地の境界など、平和裡に共存するための決まりごとが存在する。この決まりごとは口承で伝えられるため、都度、村どおしが集まっての確認がおこなわれる。こうした「確認の儀式[6]」を取り仕切る者は“Holder／ホルダー”と呼ばれ、各村の権力者が担う。その儀式の開催を呼びかける村では、隣村からやってくる何百人という男たちに豚や水牛、米でつくった酒（ライスワイン）などを呑み食わせ続けなければならない。また、その儀式は数日間開催されるため、その期間中ホルダーは隣村からの男たち、そして自身の村の人々、つまりはその場を共有するすべての人に分け隔てなく呑み食わせ続ける。

興味深いのは彼らに「私欲のために財産を貯め込む」という感覚が薄いことだ。この儀式ひとつ取っても、ホルダーはかなりの数の豚や水牛を費やす必要がある。こうした財産分配の在り方が集落内や近隣集落との公平や平和を保つ一要素であり、長年培われてきた彼らの公共ともいえる

---

3 首都マニラのCubaoやPassyからジェネシス社（http://www.joybusph.com/Home）やビクトリーライナー社（https://www.victoryliner.com）がバギオ行きのバスを運行している。

4 CGN Webサイト：https://cordigreen.jimdofree.com

5 ゲストハウスTALA 住所：25 J.Felipe Street, Gibraltar, Baguio City, 2600 Philippines／Webサイト：https://www.tala-guesthouse.org

6 カリンガ州では“Bodong”と呼ばれ、英語だと“Peace Pact”（平和協定）と訳される。Bodong：https://en.wikipedia.org/wiki/Bodong

概念だろう。しかし現代では、豚や水牛といった財産だけでは生きていけない貨幣経済がこうした村々にも浸透しつつある。豚や水牛を貨幣に替えたり、出稼ぎなど集落外に収入源を求めるために、これまでの生活文化が維持できなくなり、この食う／食わせるという祭礼文化も成り立たちにくくなっている。なので、このやり取りを省いた儀礼のみを残したり、祭りそのものが途絶するケースも多くなっているという。

そんな現状において、映像作家であるキドラット・タヒミック[7]はコーディリエラ地方の山岳地帯に位置するイフガオ州に継がれてきた収穫祭“Punnuk／プンノック”を復活させている[8]。その祭りを取り仕切るホルダーに、祭りの参加者に振る舞う豚を買うための資金を提供したのだ。毎年、夏季の収穫に合わせておこなわれるこの祭りはハパオ村、バアン村、ヌングラナン村の三村協働によって開催され、川に入っての綱引きを中心とした儀式となっている。途絶前には男性のみがこの儀式を担っていたが、近年では女性や観光客など、様々な人々が参加できる設えとなった。また、賞金も用意されている。復活を遂げ、集落内に限らない多様な人々の出会いを誘発するこの祭りには毎夏たくさんの観光客が訪れるようになり、2015年にはユネスコの無形文化遺産にも登録された。

この収穫祭に象徴されるように、イフガオ州には世界文化遺産にも登録された見事な棚田が広がるが、近年では不耕作地が増えている。その一因としては先祖代々継いできた米を金銭に替えることは禁忌とされているためだ。土地で受け継いできた米／種を金銭に替えることは祖先と子孫への冒涜に当たる。以前、反町さんが見たイフガオ州内の米の収穫では、男性たちは米倉の下でシャーマンとともに鶏の血や内臓を用いた占いをし、女性たちは人類誕生の瑣末が歌詞となった稲刈り唄を謡い、米の収穫をしていたという。稲刈りは人手が要るため、集落総出でおこなわれるが、ひとり、明日刈り取る予定の田の稲を刈っている。「なぜ、ひとりだけ向こうで稲を刈っているのか？」と反町さんが尋ねると、「彼女はこの田の所有者で、来年に植えるためのより良い種を選んで先に摘んでいる」と返事があったそうだ。このように米／種に現在の自分たちが生かされることはもちろんのこと、その土地で田を開墾し継いできた祖先への畏敬や、これから産まれる子孫の繁栄といった願いを彼らは米に込めている。日本に置き換えれば、盆には祖霊が集落に還り、祖霊とともに愉しむ民俗芸能があるように、彼らにとっ

プンノックの模様。（反町氏より提供）

イフガオの棚田群。（反町氏より提供）

7 キドラット・タヒミックプロフィール：https://cinematrix.jp/tahimik_japan/about_tahimik.php

8 日丸美彦著　ヒマラヤ学誌 No.20, 106-118, 2019『ルソン島北部山岳地域ハパオ村の収穫儀礼 綱引きプンノックの復活』参照

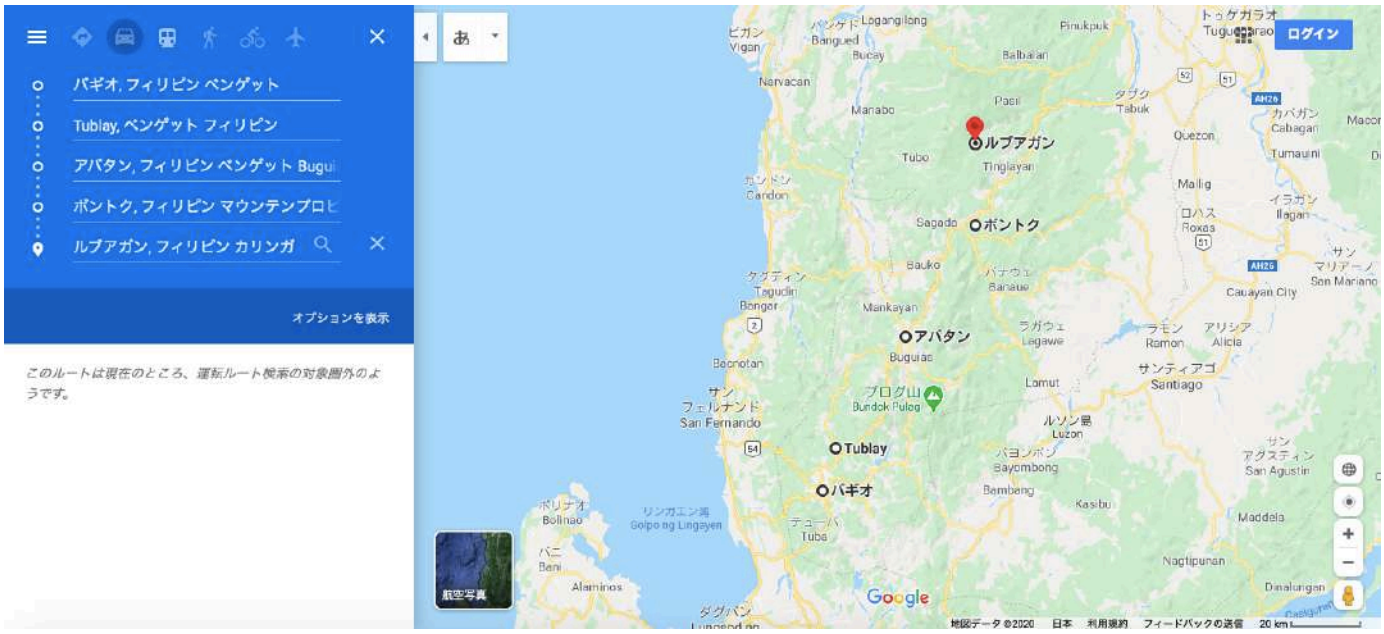
て米の収穫もそうした彼岸の人々との邂逅の場として存在するのかもしれない。ゆえに米を売買することは許されず、しかし現在では生活に貨幣が必要となるため、街へと出稼ぎに出る。そのために不耕作地は広がり、祭りにおいてもその実施が困難になるという悪循環が起きている。

また、先に「私欲のために財産を貯め込む」といった概念は薄いと書いた。ではそもそも「貯める」という概念も彼らにはないのかと思いきや、１年分ほどの米を常に蔵に納めているという。それは災害時用の備蓄であり、これまでの彼ら自身の歴史に学んだ文化だ。もちろん、それは私財ではなく、集落としての米であり、ここにも歴史を活かした彼らの公共性が垣間見える。

＊

カリンガ州ルブアガンでの葬送の様子。石棺に故人を納めるとともに、豚の喉元を割いている。（報告者撮影）

右の写真は同じくコーディリエラ地域に位置するカリンガ州のルブアガンという集落の葬送の模様である。反町さんに当地の紹介を受け、CGNスタッフであるHector Kawig（通称：エキ）が案内を引き受けてくれた。フィリピンではFXと呼ばれる乗合ワゴン車でバギオを12時過ぎに発ち、ツゥブロイ/Tublayへ。そこで別のFXに乗り換えてアバタン/Abatanに。そこで再度乗り換えてボントック/Bontocまで到着した頃にはすでに19時を回っていた。ルブアガンへは明日向かうとして、ボントックに一泊しようとエキとホテルにチェックインしようとした際、ボントックではコロナウイルスの影響から渡航後14日以内の外国人は保健所で検査を受ける必要があると告げられた。フィリピン政府より自治権を委ねられているコーディリエラ地方独自の疫病に対する意識の高さを感じた一件であった。



バギオ、ツゥブロイ、アバタン、ボントック、そしてルブアガンの位置関係。引用したGoogleマップにはボントックから先、ルブアガンの運転ルートは表示されなかったが、ジプニーが走っている。

翌朝、ボントックから第二次世界大戦後にアメリカ軍から払い下げられた軍用ジープを乗合に改造したことに始まるフィリピンの足・ジプニーに乗る。ここから先の光景は秘境という名にふさわしい。深く切れ込んだ谷を縫うようにジプニーは走り、水牛は道に寝そべり、霧雨降る湿気を含んだ空気が車内を抜けていく。何度かのトイレ休憩と給油を挟みながら、昼を迎えようかという頃にようやくルブアガン/Libuaganに到着した。

上の写真は式を終え、遺体を奥の石室へと埋葬し終えた場面であるが、その手前では豚の喉元を切り裂いている。反町さんへの聞き取りにもあったように、フィリピンにおける祝い事や儀式、選挙など人が集まる場では豚が振舞われることが多い。この葬儀にも肉はもちろんのこと、血や骨まで調理され、余すところなく来客に振舞われる。会場となった故人宅には、数百という列席者が所狭しと居り、みな式が始まるまで思い思いに過ごしていた。３、５、９、11日と続く奇数日から遺族が選択し、日を連続して式は執り行われる。長寿を全うするほど長い葬送期間が設けられ、短命だと短く済ませる。また、葬儀は牧師を主としておこなわれるが、その補佐や聖書の朗読は故人の兄弟が務め、葬儀中に掛かる音楽も友人たちによる生演奏であった。豚一頭をまるまる使った料理の数々は故人や近隣に住まう女性たちによって調理されていた。こうした手作り感を随所に感じるアットホームな会場だが、軍服のフィリピン兵の姿もみえる。訊けば葬儀の場で現政権に反抗する集団意識を育んでいないかを監視するためだという。

葬儀の模様。棺には布地が掛けられている。（報告者撮影）

故人が納められた棺には丁寧に織り込まれた布地が掛けられていた。ルブアガンはカリンガにおける「織物の首都」とも呼ばれ、いまも多くの織工が住んでいる。その伝統に立脚したバックストラップ織りの手法を集落外の人間にも伝え、革新とを行き来しながらその文化を後世に伝えることを目的に、この集落には“Lilayan/リラヤン”と呼ばれるアートスペースがある。ルブアガン語で「リラックスする場」という意味を持つこのスペースは、映像作家であり、結婚を機に妻の生まれ育ったこの地と関わりを持ったRuel Bimuyagによって開設された。ルブアガンはかなりの山間部に位置することもあり、このリラヤンでは滞在も可能である。その織りの技術を学べることはもちろん、アーティストの希望に沿った作品制作もできる。実際、Ruelの妻もまたアーティストであり、継承している織りの手法から独自のデザインを考案し、発表している。

ルブアガンのアートスペース・リラヤン。写真は以下Facebookページより転載
https://www.facebook.com/pg/Lilayan-721737837958006/about/?ref=page_internalLubuagan

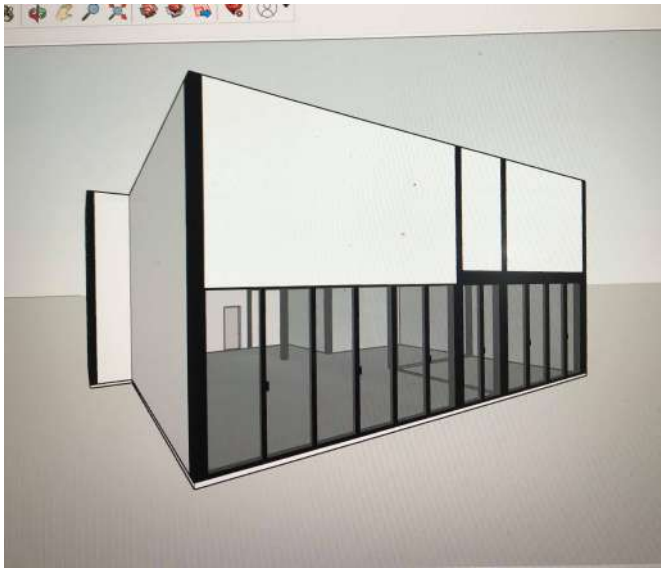
織りの手法をはじめとしたこの集落が守り育んできた固有性をアートによって現代に再

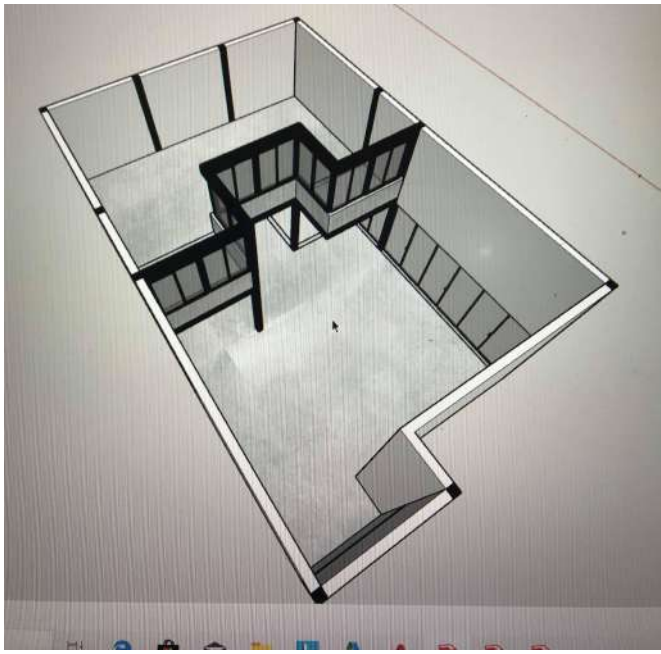
価値化し、また、アートという他者性を入れ、伝統との交わりを生むことによって、未来へと集落を守り育む。リラヤンの活動はこれまでにも連綿と続いてきた純然なる伝統文化の継承手法を、近代以降に輸入されたアートという文脈を用いながら進める事例といえるだろう。

３.【活動記録２】フィリピン・マニラにおけるアートと伝統文化の邂逅

ここまではコーディリエラ地方に古くから継がれる生活文化と、現代におけるアートとの接続を紹介した。一点断っておきたいのは、フィリピンには多数の島と多様な民族、言語が存在し、一概に「これがフィリピンの文化だ」と名指すことは困難である。また、コーディリエラ地方自体も広大なので、文化の在り方も当然その集落ごとに異なる。つまり、ここで紹介した事象がフィリピン全体を表象しているわけではないが、こうした伝統的な生活文化の次代への継承は多くの土地で困難となりつつある。では、危機に置かれる民俗芸能をはじめとする古くからの生活文化はいま、どのような継承が図られているのか？ ここからは首都・マニラにおけるアートの在り方や、アーティストとの連携から伝統的な生活文化の継承を図る例を概観する。

Jk アニコチェ[1]は、反町さんとともにフィリピンでのリサーチの受け入れてくれたパフォーマンス作家だ。彼は“Sipat Lawin Inc[2]”というカンパニーの中心メンバーで、先述した国際演劇祭Karnabalのフェスティバルディレクターを務めていた。報告者はこのKarnabalより招聘を受け、2015年から３年を掛けて『たこを焼く』という作品を協働制作した。2017年秋にKarnabalを終えて以来、東京で会う機会はあったが、フィリピンで会うのは久方ぶりとなった。フィリピンでのJkは、東京での彼とはテンションがまるで違う。フィリピンで会うJkはまさに水を得た魚だ。その話題を向けると、Jkはフィリピンの文化芸術教育について触れた。16世紀より始まるスペイン、アメリカ、日本による統治からの独立を経て、フィリピンの文化芸術を世界へと紹介する機会が増えた1960年代。フィリピンのアーティストたちは海外への渡航に際して、自国を熟知し、渡航する国の人々に自国を語れなければならないとされてきた。長く植民地支配を受けてきた歴史が、いわば「フィリピン代表」として赴くという意識を生んだのかもしれない。フィリピンのアーティストが特に西洋に赴いた際には、以下の二択を選ぶことが多かったという。自国擁護者として西洋に対して攻撃的な姿勢を取る。あるいは西洋に対して、自分は劣っているということを内在化する。このようにフィリピンのアーティストは国外において自国の歴史や現状を背負い、「フィリピン人を演じて」活動することが求められてきたという。





マニラの劇場兼リハーサル室のデザイン図。（Jkより提供）

さて、３年ぶりにフィリピンという自身の水で出会っ

[1] Jk アニコチェ プロフィール：https://www.apaf.tokyo

[2] https://jfac.jp/culture/features/asiahundred06/?fbclid=IwAR0_A8-kC5oHHs1ou-GNvKe2dQnird4P9wT-a8M4S5Xy7BUiaoUBzsUSiy0

たJkは、いま進めているプロジェクトと、これからの展望を快活に語ってくれた。彼はいま「劇場」をマニラとバギオ、そして海沿いの街・Agoo/アグーの漁村につくりたいという。

フィリピンの多くのアーティストはマニラを拠点としている。それはマニラがフィリピンの首都ゆえに、情報も仕事も金銭も得やすい環境があるためだ。一方で、フィリピンでは日本のような国家によるアートへの支援はほとんどない。そのため劇場もアートスペースもプライベートで運営されていることが多い。また、例えば、演劇はその作品づくりとして出演者で集まり、ひと月ふた月と時間を掛けて稽古をおこなうことが多いが、そうした創作の場がアーティストの数と比してマニラには絶対的に不足しているという。Jkはマニラのこの現状に際して、自宅近くのフードコート跡地を借りた。例えば、演劇の稽古のためにリハーサル室を４時間借りると、約2,000ペソ掛かる[3]。稽古を月に20日間おこなうとなると40,000ペソ。それならいっそ自分で場所を借りて、改装し、みなでリハーサル室や発表の場として使えたほうが有益だ、という発想だ。この劇場には２階に３部屋のリハーサル室と、上演もおこなえる１階部分から成るというが、その利用者となるアーティストからは金銭を徴収しないという。基本的にJkがその改装費や賃料を払い、あとは寄付を募ってやり繰りしていく。そして、あくまでもこの劇場は、コマーシャルアートのためではなく、作品制作の実験の場であるとJkは言った。

“SIPAT LAWIN AND FRIENDS”のカンパニー名で、オーストラリア・メルボルンのArts Houseで上演された『Are You Ready to Take the Law Into Your Own Hands』の稽古風景。出演者が住む家の駐車場で稽古がおこなわれている（報告者撮影）

彼はまた、先のSipat Lawin Incの一活動として“Komunidad X[4]”を展開している。フィリピンの公用語とされるタガログ語で「コミュニティ」を意味する“Komunidad”であるが、この活動では科学者、農家など多様な専門性をもつ人々と協働し、市民の参加と社会の発展に寄与する「人生」というパフォーマンスを創造するという。その「人生」というパフォーマンスにおいて標榜されているのはエコロジカルな社会である。エコロジカルな社会として／のための芸術の創造をおこなう、その交わりの先にあるコミュニティ／Komunidadを、未だ見ぬ“X”としているのだろう。

このようにJkの活動はアートの立ち位置から、都市における公共を担っていると考える。これまで彼が手掛けてきた作品も観客参加型のパフォーマンスが多かったが、活動が捉える範疇はより長期的かつ社会に具体的なインパクトを与える「なにか」へと変化している。コーディリエラ地方では長年培われてきた生活文化に彼ら独自の公共性が垣間見られたが、植民地化や都市化などを経て、すでに古来からの文化が断絶してしまったともいえるマニラにおいて、また、政府としてもコミュニティの文化やその発展に深く関与しない現状において、民俗芸能をはじめとする生活文

---

3 2020年６月７日時点のレートで、2,000ペソは日本円で4,400円の価値をもつ。また、フィリピンの平均月収は22,250ペソ、48,948円となる。（2015年データ・Philippines Statistics Authorityを参照）

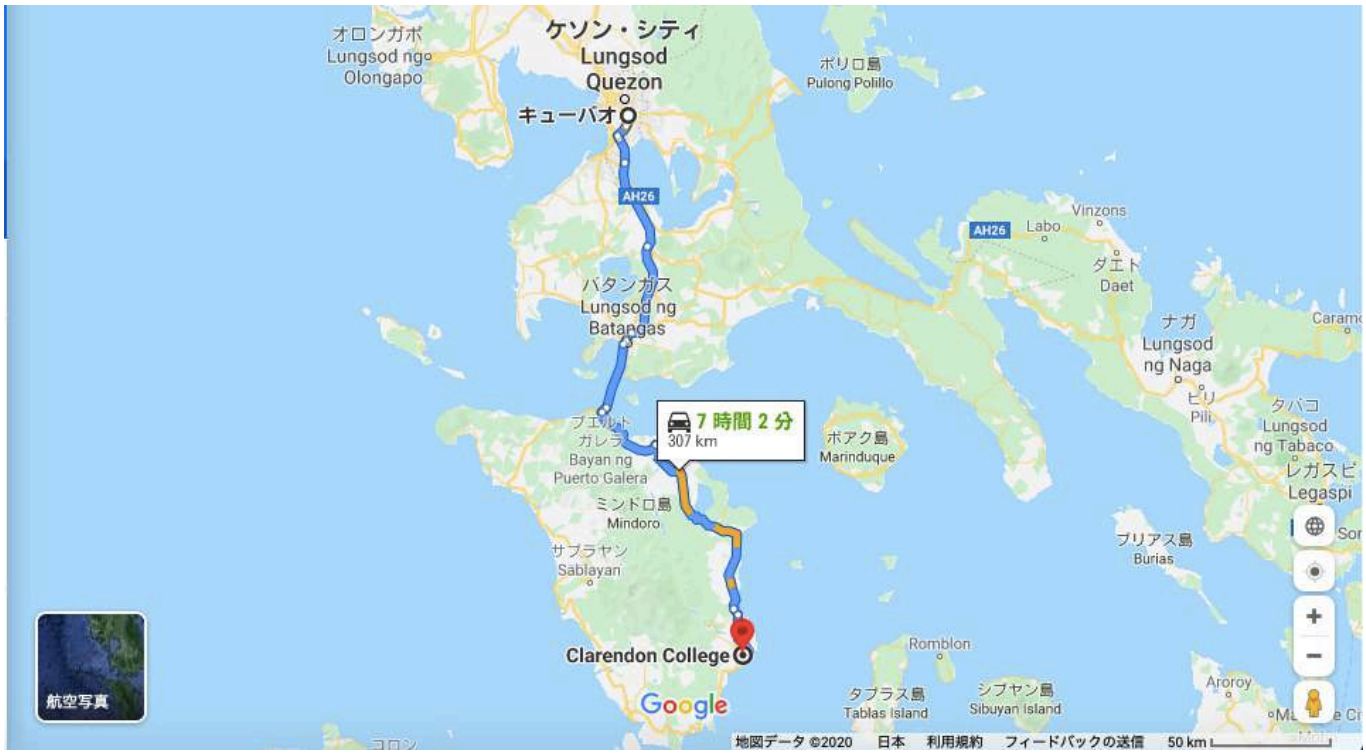
4 KomunidadX webサイト：https://www.facebook.com/pg/KomunidadX/about/?ref=page_internal

化が果たしてきた公共性を、マニラという都市においては個々のアーティストが担っているのかもしれない。

＊

　また、JkはKomunidad Xの活動として、ミンドロ/Mindoro島に設置予定の博物館構想にも関わっている。ミンドロ島の先住民族・Mangyan/マンニャンの文化をアートの手法を用いながら後世に継いでいくことを目的としたプロジェクトだが、Komunidad Xの役割としてはどのような施設が適当であるのか、その合意形成や計画、運営に到るまでを市民とともに学び練り上げるワークショップをおこなう。そのワークショップでは、Cultural exchangeやMuseum managementなど、３年にわたり様々なカリキュラムが用意されており、まさに多様な専門性を有したメンバーが集い、いまあるコミュニティの先へと歩を進めようとするKomunidad Xにふさわしい案件といえるだろう。また、すでにフィリピン政府から博物館建設のための認可と資金は、この計画の主催者である大学[5]に下りているという。「フィリピン政府が文化への資金拠出をおこなうこともあるの？」とJKに訊くと、「アート文脈では、国からの選定を受けたNational artistを除いて援助などはないが、教育分野ではよく拠出される」という。“Center for Culture and the Arts/文化とその芸術のための施設”をミッションに掲げるこの博物館とはどのようなプロセスを踏んでその設置が目指されているのか？ ミンドロ島でのワークショップに同行した。

　マニラの南方に位置するミンドロ島へは、マニラ首都圏内のCubao/クバオからバスに乗り、Batangas/バタンガスへ。そのバタンガスの港からPuerto Galera/プエルトガレラまでフェリーで向かい、その大学のあるBagumbayan/バンクバヤンまでは乗合ワゴンのFXで向かった。到着までおよそ７時間。朝にクバオを出立したが、到着した頃にはすっかり夜となっていた。そして、翌朝からは



クバオからバタンガス、プエルトガレラと経由し、バンクバヤンまでの経路図（Googleマップより引用）

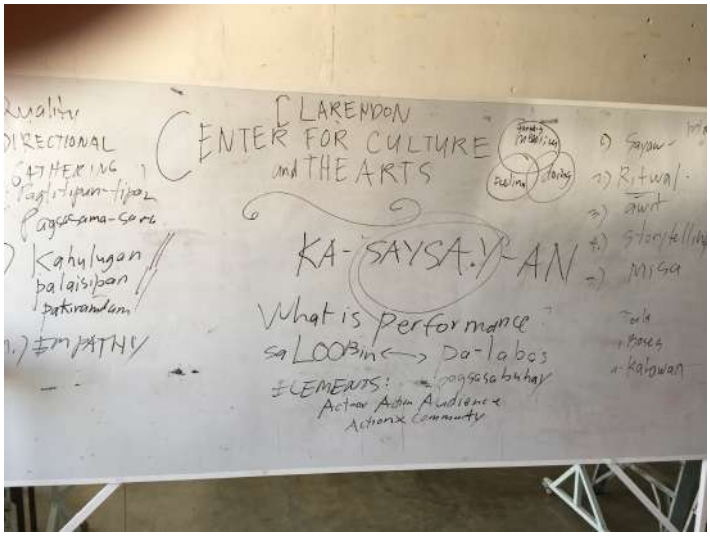
---

5 この博物館構想はClarendon大学が受託している。Clarendon大学 webサイト：https://portal.edukasyon.ph/schools/clarendon-college

じまるワークショップは、まさに３年間に及ぶ事業の初日となる。教育、ビジネスなどを学ぶ大学生やその教員など、多くの人々が出席した。午前中はどのような博物館にしたいのかを個々で考え、それを教育やビジネスなどの専門ごとのグループ内でまとめた後、全体へと共有。午後には、それぞれの専門性に立脚して、海外からの旅行者やブロガー、研究者や生徒といった博物館の利用者の視点になってどのような施設が良いかを考えていく。付箋を使いながら、個人→専門性を共有するグループ→クラス全体へと、意見を集約しながら共有していく。ある種古典的な手法ではあるが、個々の意見を丁寧に拾い上げるJkのファシリテート能力の高さや、それを上回る生徒たちの積極的な参加によって、最後までクラスの集中力が落ちることがなかった。今回は初回ということで、大学内の生徒や教員を対象としているが、これから先は地元住民や、８つの部族から成るMangyanの人々ともこの構想を練っていくことになる。それはときに自身が普段用いる共通言語ではないことばを編み直しながら、コミュニケーションを互いに図ることとなるだろう。その意味で、この個人→専門性を共有するグループ→クラス全体へというプロセスは、今後の博物館構想が辿る道をミニマムに追ったものともいえる。

　ワークショップ終了後、Jkはわたしに「どのように橋を架けることができるかだ」と語った。Mangyan文化を中心に据えるこの博物館には多様な人々が足を運ぶだろう。訪れる利用者の思惑を想像してデザインを施し、ある民族の生活文化に集い、繋がる。それはある種、これまでの民俗芸能が育んできた関係性の逆行とも思える。生活文化はあくまでもその集落内の財産であり、ゆえにその集落に住まう者はそれを継いでいかなければならないという価値観。そこには外部者が関わる余地はなかった。しかし、この博物館構想では、その固有文化に外部者が関わる余地や可能性をどう生み出していくのか、という発想である。なぜわざわざその固有文化を取り上げ、広く共有し継いでいく必要

ワークショップの模様（報告者撮影）



ワークショップで使われたホワイトボード。ワークショップではタガログ語が主に使われていたが、タガログを母語としない生徒も数人いた（報告者撮影）

３日目の朝、ワークショップ外の時間で、Mangyanの集落へも訪れた（報告者撮影）

があるのか？ そうした根源的な課題にもこれからワークショップを通じて思索していくのだろう。そして、博物館という場を介して、固有の生活文化を広く共有財産とすることによって生じる問題点もまた挙がるだろうが、それもこのワークショップを通じて育まれる関係性によって、対話を重ねながら乗り越えていく。「どのように橋を架けることができるか」ということばには多様な可能性と意味合いが含まれていた。

４.【活動記録３】タイ・チェンマイのカレン族に継がれる生活文化

３月１日からはタイでのリサーチ展開となった。マニラから飛行機でタイの首都・バンコクへ。そこで乗り継いでラーンナータイ王朝の首都であったチェンマイに入った。その機上はちょうどひと月前のマニラへの渡航とは異なるコロナウイルスへの危機感がひしひしと感じられた。なにが正確な情報か、世界中のみなが分からない状況下で飛行機という逃れようのない密室を多国からの他者と共有する不安が、乗り合わせた全員から感じられた。

さて、この報告書の冒頭で述べたとおり、タイへはこれがほとんどはじめての渡航となる。なので、日本ではもちろんのこと、フィリピンでも出来る限りタイに関する情報を集めていた。そうした折に、先述したコーヒー栽培で持続可能な経済活動をコーディリエラ地方の村々に提案することで、その固有文化を守る反町さんからカレン族の話を聞いた。多くはミャンマーやタイに住まう少数民族カレンの人々と反町さんとは、2012年にバギオで開催された先住民族会議[1]で出会ったという。同じくその会議に参加していたコーディリエラ地方の若者たちを前に、「あなたたちはまだ恵まれている。あなたたちの祖先が培ってきた固有の言葉や唄、踊りは禁止されることなく、こうして継がれてきた。我々はそうした生活を営むことすら禁じられてきたのだ」と語った。参列していたアイヌの人々はそれを聞いて涙していたという。

チェンマイからソンテウと呼ばれる黄色い乗合バンに乗って、Ban kadという終着点を目指す。都市を抜け、郊外に位置する空港を越え、景色はみるみる見渡すかぎりの平原となった。スピードを上げるテンソウ。開け放たれたその車内にはチェンマイでの暑さを忘れさせる涼しい風が抜けていく。先の言葉をコーディリエラの若者たちに投げかけたのは、北部カレン族のカリスマとも呼ばれるJony Odochao/ジョニ・オドチャオである。カレン族を育んできた森林を政府や大企業から守るために、彼は樹木に襷をかける儀礼を執りおこなった。それにより、その樹木は得度して神聖な存在となる。そうして計５千万本の樹木を伐採から救ったという[2]。そしてこのBan kadで待ち合わせるのが、彼の６番目の子・Siwakorn Odochao/シワコーン・オドチャオ（通称：シワさん）であった。

「彼らに会ったら幸せになるよ」と反町さんは言った。と同時に「もうわたしのこと、覚えていないと思うけれどもね」とも加えていたので、半信半疑でシワさんへと連絡を取ったが、あっさりと「Oh yes welcome」という返事とともに、右の写真が送られてきた。かつての王朝であったチェンマイの城門跡地から出るソンテウに乗って終着となるBan kadの市場で待ち合わせよう。

シワさんから届いたBan kad行きのテンソウのりば。チェンマイ門停留所から出ている（報告者撮影）

---

1 2012年の先住民族会議は“Kapwa”（タガログ語で「隣人」）のタイトルで、先のキドラット・タヒミックの妻が主催した。Websaite：https://kapwahan.wixsite.com/kapwahan

2 『レイジーマンコーヒー物語』（辻信一 著）参照 http://www.mahoroba-jp.net/about_mahoroba/tayori/topix/topix2017/topix2017_11/201711reiji.pdf#search=%27レイジーマン+辻%27

そこから先、わたしたちの村までは公共交通機関がないので車で迎えにいく、と。

1時間ほどでBan kadに到着し、待ち合わせの市場で待つこと30分。ついにシワさんは現れた。久しぶりに街まで下りてきたという。そこからはシワさんの車に揺られる。平原を離れ、山々へと入っていく。道に沿って流れる川の岸には、象たちが飼養されていた。このあたりもかつてはカレンの人々が住まう集落であったが、ときの権力者によってカレン族は徐々に山奥へと追いやられた、とシワさんは言う。象もカレンとともに生きてきたが、このあたりはチェンマイなどから休日に訪れる人々へ向けた自然を楽しむための観光地となっており、象もそのために飼われている。

到着したシワさんの家は、わたしに不思議な懐かしさを覚えさせた。開け放たれた高床式の家屋。その庭には鶏が放されており、親鶏に付き纏う子鶏たちがぴよぴよと鳴いている。それはジャングルとも近い。見たこともない背高の草木を見上げれば見事な果実が実っている。シワさんはここの畑でさまざまな作物をつくっているが、コーヒー豆の栽培と焙煎もおこなっている。その名も“LAZY MAN CAFFEE[3]”。日本語にすれば「怠け者珈琲」となるこのコーヒーに込められた思いは、カレン族の歴史と深く繋がっていた。

自宅に併設されるLAZY MAN COFFEEにて季節によってどういった作物が実るのか、コーヒーを振舞いながら自然の循環性を語るシワさん（報告者撮影）

いまから50年ほど前。「ロイヤル・プロジェクト」と呼ばれ、ときの国王と政権とで進められた農村近代化計画があった。カレンの人々は森を切り拓き、借金をして農薬や化学肥料を大量に使い、コーヒーや阿片の原料となるケシなどの換金作物だけを育てるようになった。しかし、ケシを育てる彼ら自身が中毒になったり、コーヒーの栽培も当時うまくはいかなかったという。経済活動を中心に据え、それに邪魔になる物事を排除していったその犠牲の上に成り立つ近代農業に嫌気が差したのが先のジョニ・オドチャオさん。我々が継いできた生き方は自然との対話による共生にあったはずだと、カレン族に伝わる民話「レイジーマン」に習って怠け者となることに。自然の摂理に委ねていれば、水も果実も食料も得られる。自然を人間だけの価値である経済論理に従わせることは結果、自身の首を絞めることになるだろう。そうして敢えて怠け者となったジョニさんを周囲の人々は白眼視したという。より収穫量を上げようと多くの農薬と化学肥料、農業機械を購入し、さらなる借金の返済に追われ、土地もやせ細っていった多くの農民は結果、農業を続けることができなくなった。彼らは村を離れ、都市へと出稼ぎにいくことになる。一方、カレンに継がれてきた自然との共生の重要性に早い段階で気づいたジョニさんの畑は蘇り、シワさんへと代替わりをしたいまも、コーヒーをはじめ、様々な作物が実をつけている[4]。

---

3 LAZY MAN COFFEEの住所：https://www.google.com/maps/place/Lazy+Man+Coffee/@18.6809041,98.5478343,17z/data=!3m1!4b1!4m5!3m4!1s0x0:0x278b7abe3aebd963!8m2!3d18.6809041!4d98.550023?hl=th

4 トモトモ参照。LAZY MAN COFFEEで栽培されたコーヒー豆もこちらで購入できる：https://yukkurido.shop-pro.jp/?pid=134630377

シワさんと連絡を取った際に、上のBan kadへの行き方を示した写真とともに「３月６日に来るといい。森との対話の儀式があるから」とメッセージを受け取った。ジョニさんの娘で、現地で看護師を務めるMupor/ムーパーに「なんという名前の儀式なの？」と訊くと、「名前はないよ。森と空とに感謝を伝える儀式」と返ってきた。毎年、この森と空とに感謝を伝える儀式はカレン族のコミュニティの持ち回りでおこなわれているが、コミュニティごと順々にというわけでもないらしい。以前このコミュニティで開催されたのは10年ほど前で、今年はたまたまこのコミュニティが選ばれたという。

夕飯をご馳走になった夜の19時頃、「明日は早いので、山に一泊しよう」とシワさんから声を掛けられる。再び車に乗り込み、明日に儀式のおこなわれる山中へ向かった。集落を抜けると未舗装となり、川が枯れた流路のような道無き道をいく。ヘッドライトが照らす先以外になにも見えず、車内は大きなバウンドを繰り返す。携帯に目を遣ると、すでに圏外となっていた。こうして１時間ほど山中を進み、その儀式がおこなわれるという場所にたどり着いた。月はいかに明るいのかを知り、メモを取ろうと携帯を開くと、目を刺すような眩しさにすぐに閉じた。

その際の夕飯。大人数でもこの小さな円卓に食事を並べ、その周りにみなで座って食べる（報告者撮影）

翌朝、寒さで目を覚まし、周りを確認すると、それは山の中腹部であった。焚き火をし、シワさんとともに持参した肉を焼いて朝食を取る。「なぜここが儀式の場なの？ カレン族にとってここは特別な場所なの？」と尋ねると、シワさんは「水は湧き出て、樹々は悠々と茂っている。別に場所が決まっているわけではなく、自然への感謝を示すに適切な豊かな場所だから」と彼は言った。

９時を過ぎる頃には人が集まってきた。コロナウイルス感染チェックとして全員に検温を施すため、儀式がおこなわれる広場の前には長蛇の列ができている。検温を終えた人は、その広場を囲うように結ばれた紐に、白紐を垂らす作業や、竹を編み込んでつくられたパゴダを四方に挿して形成された結界内に石を積み上げていったり、周りの樹木に襷を掛けたり、歌を唄ったり、木陰でおしゃべりをしたりと、ルブアガンでの葬送の際のように、みな思い思いに過ごしている。

カレン族の伝統衣装。未婚の女性は白い衣装を着る（Mupor撮影）

儀式は予告されることもなく、おもむろに始まった。あるいはそれはわたしが勝手に「ここからが儀式の始まり」と思っているだけで、その準備やおしゃべりからすでに始まっていたのかもしれない。僧衣を着た仏教僧が並び座り、お経を唱え始める。それが終わると、広場を取り囲んで結ばれた白い紐に垂ら

してあった白紐を一人一本ずつ解き、高齢の男性にその紐を呪文とともに左手首に結ってもらう。わたしはその一つひとつの行為の名前や意味をムーパーに尋ねたが、その多くは名前を持たず、意味合いも漠然としていることがわかってきた。それでも言葉を尽くしてイメージを共有しようとするムーパーを見て、なぜわたしはこんなにも一つひとつの行為の名前やその意味を求めるのだろうと思った。もちろん、リサーチでこの土地を訪れているからということもあるが、彼らにとっての正解を知ることで理解できた気になろうとする癖のようなものだと理解した。その行為一つひとつの名前や意味合い以上に、この日、この場所にたくさんのカレンの人々が集まって、肯定的に他者や自然とのやりとりが編まれていく、その行為自体が価値であるとようやく気付けた。

儀式で用いられる白い紐と石塔。上部の白紐が広場全体を囲っており、垂らされた白い紐が各人の左手首に結ばれる（Mupor撮影）

儀式の模様（Jeew Chanasit撮影）

翌日、シワさんはまたBan kadの街まで車で送ってくれた。行きしに通った川沿いの観光地を通り過ぎる際に彼は「不思議でしょう？ 人は自然とともにある生き物なのに、都市の人は休日にわざわざここを訪れ、自然を求める。そしてまた、寄る瀬ない都市へとお金を求めて帰っていく」。それを聞いて、なんと応えていいかわからなかった。わたしもいままさにチェンマイという都市への帰路についており、そして、このリサーチを終えれば日本の都市へと帰っていく身だったからだ。わたしが寄る瀬のない都市へ帰る理由とはなんなのか？ と返すことばが見つからずに黙っていると、「ほら、もうここは空気が違う」と彼は言った。

５. フェロー活動を終えて

世界的な拡大を続けるコロナウイルスと並走するようにフィリピン、タイとリサーチを続けた。フィリピンは３月15日に、タイも出国翌日となる３月26日から都市封鎖に入った。こうした未曾有の状況下において、現代社会が然したる価値を置いてこなかったアートや民俗芸能がどういった力を発揮できるのか？ グローバリズムなどの世界の効率化を背景にこれまでにない拡大を見せるコロナウイルスの迫りを身を以て感じながら、それらをリサーチできたことはとても貴重な体験となった。このコロナウイルスの世界的拡大を機に、わたしたちはなにを見直し、これからの「新しい日常」を築くことができるのだろうか？ 短期的なコロナ対応に留まらず、その根本的な生活の見直しをおこなう際に、古来からの知恵が積み上げてきた民俗芸能をはじめとする生活文化と、そうした知恵を共有しながら対話の場を拓くアートが果たす役割は大きいはずだ。

このリサーチに際し、ふたつのプロジェクトについての思索を深めたいと臨んでいた。ひとつは中国・武漢におけるアートスペースの協働ディレクションの在り方について。もうひとつは滋賀県・朽木古屋集落における関係人口による当地の生活文化の継承を図ることである。武漢での活動は当地への渡航が不可能ないま、難航しているが、朽木古屋でのプロジェクトについてはこのリサーチを通して、大きく進展している。以下はこのリサーチを終え、帰国後に書いた助成申請書の一部である。

> 高度経済成長などの社会構造の変化に起因する住民の流出やその高齢化から、消滅の危機に瀕する滋賀県高島市の朽木古屋集落。現在、当地の定住世帯数は５世帯以下であり限界集落に該当する。かつての当地は若狭から京都へと海産物を卸す鯖街道上の要所であり、古来から人と文化の結束点であった。そうした文化のひとつに六斎念仏という盆行事としての民俗芸能が当地に継がれている。滋賀県の選択無形民俗文化財に指定されているこの芸能だが、人口の減少により2012年に途絶。2016年より高島市教育委員会が中心となり、集落外のアーティストなどを入れながら復活・継承へ向けた事業が進められてきた。申請者はその際に依頼を受け、その芸能の復活・継承に関わってきた。今夏には六斎念仏の復活から５年を数え、その継承事業としては順調に推移しているが、このまま住民の減少が続き集落が消滅すれば、六斎念仏自体は残すことが出来ても、相互に関連し合い育まれてきた当地の生活文化は失われてしまう。六斎念仏はあくまでも当地における一儀式であり、盆の時期だけでも施餓鬼や河原仏など、当地の生活文化と結ばれた儀式が数多く執り行われている。六斎念仏を当地の生活と切り離して「型」としてのみ残すことは、民俗芸能の形骸化といえる。そして、この生活文化の継承に残された時間は、現地の高齢化を鑑みるに限られている。
>
> 消滅の危機に瀕する当地において、出生や在住など土地の当事者性を前提とせずに、培われてきた集落文化を広く共有。関係人口による継承の仕組みづくりをおこなう。関心に応じて緩やかに集い、当地に住まう高齢者から長年育まれてきた土地の文化を「共有の知恵」として実践を通して学ぶ。また、集った各人の専門性を活かしながら、得られた知恵を現代にも通じる価値に翻訳して発信。新たな関係人口の掘り起こしを図る。そうした現代の社会状況でも実現可能な継承の仕組みを、劇場における「広場」の方法論を用いて展開する。たとえその集落に住まう人が今後いなくなったとなっても、関係者の繋がりに

よって当地の文化を継承し、各人の生活や、当地に生かし続けることで持続可能なコミュニティを実現する。

この朽木古屋でのプロジェクトでは、限界集落における持続可能なコミュニティの在り方を当地で関わってきた六斎念仏という民俗芸能以外でも実践し、またそこで得られた経験を現代の価値に翻訳して広く共有していく。また、劇場機能を限界集落へとインストールし、過疎化という具体的課題に充てることは、逆説的に「劇場の価値とはなにか」や「民俗芸能の今日的価値とはなにか」を思索することとなる。

古屋六斎念仏の模様（「朽木の知恵と技発見・復活プロジェクト」facebook pageより転載 https://www.facebook.com/kutsukichiewaza/）

コーディリエラ地方でも、シワさんたちの住まうノンタオ村でも貨幣経済の浸透が集落の大きな転換点となっていた。貨幣がもたらす豊かさもある一方で、その犠牲となる物事も多い。当然、貨幣では買えない豊かさはあり、そして古来からの生活文化に内包された知恵の多くは数値化できない。その数値化できないみえざる価値をどのように現代に共有できるのか？ それをJkはアートの手法を用いて場を拓き、時間を掛けた対話を積み重ねることで為そうとしている。

日本国内に目を転じれば、今回のコロナ禍において企業の内部留保がどれほどあったかが、倒産を余儀なくされるか否かの分かれ目ともなっている。コロナ以前はそうした企業による巨額の内部留保が景気の後退を招くということで問題ともなってきたが、皮肉にもこのコロナで内部留保の有効性が実証されたとも言える。それは個人に置き換えても同様に言えるだろう。国の支援もあるが、どれだけ手元に資金があるかが現状を乗り切るに問われている。一方、先述のとおりコーディリエラ地方でもノンタオ村でも、個人が金銭を溜め込む感覚は薄い。彼らが財産を築いてきたのはコミュニティとしてであった。それは民俗芸能や生活文化など、みえざる財産が多くを占めている。では、多くがコーディリエラやノンタオ村のようなコミュニティを失った現代日本において、共同で蓄財すべき対象は企業に当たるのだろうか？ そうした企業が保証する物事とは、金銭面以外にもあり得るのだろうか？ また、この仮説が成り立つならば、国家とはいまどう位置付けられ、なにを目的とするのだろう？

日本においてそうしたコミュニティを保持する集落の多くは、朽木古屋しかり、過疎化による消滅の危機に晒されている。過疎への対応としては観光地化や町おこし協力隊の設置などが散見されるが、観光はコロナの影響から仕組みの抜本的見直しが求められ、協力隊も人材が集まらない事態がすでに起きている。奇しくもこの２つの対応策はアートとの関わりも深い。越後妻有トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭はまさにアートを用いた過疎地域の観光地化であるし、町おこし協力隊も定職や定住先を持たず、専門性の高いアーティストがその対象ともされてきた。しかし、ではアートや生活文化とは経済活動に寄与するものなのか？ それは長期的視点に立てば地域の消費に過ぎないのではないか？ という批判もあり得る。インバウンドなどの金銭的収益を前提とするでもなく、その土地に住民票を移すことを前提とするでもない。数値化できない価値の再

創造と、その再創造の持続を支える共有の在り方が現代に求められている。朽木古屋のプロジェクトでは「数値を前提としない価値の共有」という視座から、過疎に対する現代におけるモデルケースを実践を通して提示していく。